



Title	小林愛さんの報告へのコメント：歌い、鳴らし、聴く癒し
Author(s)	鷺田, 清一
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 52-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81740
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【小林愛さんの報告へのコメント】

歌い、鳴らし、聴く癒し

鷺田清一

音楽とは不思議なものである。「潤いをあたえる」という言葉がほんとうにびったりくるほど、ささくれた心、渴いた心、落ち込んだ心を慰撫してくれる。文字どおり、撫でるように、肌にそっと触れるようにである。震えるような旋律がまるで涙のひとしずくのように感じられることもある。音楽によって心が慰められないなら、音楽が幼児から老人までこれほど広く愛されることはないだろうし、音楽産業がこれほどに巨大なものになることもなかっただろう。

だが、音楽はまた政治的なものでもある。いのちや感情の弾みを本人もコントロールできないくらいに増幅するだけでなく、ひとになにかを激しく促したり、共通の気分のなかに浸らせたり、全体行動を強いたりするし、ときには労働の能率を上げるために導入されたりもする。

ファシズム的な集団の熱狂においても、力つきた敗残者の逃避行のなかでも、葬送の儀礼（御詠歌や読経）においても、禍々しい暴力を、最後の勇気を、深い哀悼の情を内から絞りだそうと、ひとは声を響かせあう。音楽には、それほどにひとを揺さぶるところ、情動の深みから動かすところがある。ひとは失意のなかで涙とともにメロディーを口ずさみもするし、気がつけばうきうきハミングしていることもある。言葉と同じく、それはひとを慰めもすれば唆しもする。

とはいえそれはやはり、言葉と同じく、他人にかかわってゆくときの重要な媒体である。だから、語りあい、聞きあうところに自他の深い交感があるように、歌い、鳴らしあい、聴きあうところにも深い交感が起こる。カウンセリングがあるように、音楽によるセラピーというのもありうると、とりあえずは予想できる。

音はひとをどのような次元で動かすのか、それが気になっていたこともあって、音楽セラピーという、音をとおして他人に深くかかわってゆく行為に前々から関心をもっていた。

そんなおり、奈良市が全国ではじめて福祉事業の一環として音楽療法士の制度を設け、95年からは音楽療法士の養成コースを開講し、修了した13名のスタッフで活動を開始したと伝え聞いた。そして昨年末、およそ一年半にわたる養成コースを終

括する書物が刊行された。『奈良市・音楽療法士への道』（奈良市社会福祉協議会／法政出版）である。

ここでは、市内の肢体不自由児施設、重症心身障害者施設、特別養護老人ホームにおける奈良市音楽療法推進室の試みについて、さまざまな角度から報告と検討がなされている。

わたしがこの本のなかで強く関心を惹かれたのは、転職のかたちで音楽セラピーにかかわりはじめたスタッフ（元学校・幼稚園教諭、看護婦、民俗芸能や音環境の研究者、ピアノ講師らである）の試行錯誤の過程である。実際に音楽を媒介にして子どもや老人に接するとき、さまざまなとまどいやためらい、ひどく落ち込んだときの迷いやふと思いがけないきっかけで解決の糸口が見つかった経験などの、率直すぎるほどの記述である。

はじめに述べたような音楽の両義性をかんがみるとき、こうした心の揺れは痛いほどよく分かる。思いの深さと方法の不確かさとのちぐはぐな関係？

それでいいのである。セラピーの方法はそのつどだれかの〈苦しみ〉の場所に居合わせるなかで紡ぎだされるはずのものだからである。科学理論のテクノロジカルな応用はあらかじめ方法を確定したうえでなされる。セラピーはだれかの〈苦しみ〉の場所からそのつど方法を立ち上げる。だれにも適用可能な方法というのはありえないし、あってもそういう方法はほとんど効果をもちえないことは、現場のひとならずぐに分かる。

スタッフのひとりからご自身の臨床経験についてうかがう機会があった。

ある楽器を手にする、順番がくるまで待つ、前に出る……それだけでもたいへんなことなんだということに気づいたときのこと。拍手が大きな意味をもっていることを知ったときのこと。個人セッションで手応えがなくておろおろしているうちに子どもが熟睡しだし、泣きなくなったとき、「にっこり微笑みながら寝ているのでいいんです」と施設の職員が声をかけてくれたこと。

人前にこわごわ出てゆき、そこでじぶんが他者にとって意味のある存在として認められたときのときめいた気分、他者を前にしても気持ちがこわばることのない安らいだ時間……。

ここには、鑑賞とはまったく異なる音楽とのかかわりがある。音を奏でる者と聴く者とがたえず入れ替わる。人間自身が楽器になったり耳になったり音のきめに触れる皮膚になったりする。音の粒が他者とのそのつどの関係のなかに置き戻されるのだ。

いいかえると、ここには、だれかに向かって切々と歌う、奏でる、からだを震わせるという音楽の原型がある。人びとのあいだである役を演じること、楽器を奏でること、戯れること、これら三つの行為が英語では同じプレイという語で表わされることには、とても深い意味がありそうだ。

スタッフのかたの話を聞きながら、わたしが死ぬとき、好きなCDをかけてもらうのもいいけれど、横でだれかにピアノを弾いてもらえればもっといいなと、ふと思った。

（『産経新聞』1998年1月12日）